

現代社会における「出会い」の身体性に関する教育人間学的考察

朝倉 愛里

序章

人間は、人間や事物、出来事などと出会いながら生きている。そうした交わりは時に「目から鱗が落ちる」という言葉のように、見える世界を変えることがある。人間は何かと出会いながら生き、また、出会いによって自分でも思いがけなかった、しかし自分でしかありえない自分に成っていく。人間の成長にとって「出会い」は重要な出来事である。

現代社会においては、人間と人間、事物、出来事などのかかわり方が複雑化している。情報通信技術(以下「ICT: Information and Communication Technology」)^②に代表されるようなテクノロジーの進展などにより、これまでの時間、空間、身体的条件を越えたコミュニケーションの形態が出現している。二〇二〇年、新型コロナウイルス感染症(感染症名: COVID-19, ウイルス名: SARS-CoV-2)^③拡大の混乱のなかでは、感染拡大防止の観点から「社会的距離」^④を取ることや「密閉、密集、密接」^⑤を避けることなど身体と身体との距離を取る試みがなされたり、「オンデマンド型授業」「オンライン診療」「テレワーク」などICTを活用して身体と身体とを隔絶したコミュニケーションが模索されたりしている。

日常の経験における身体性が変化しつつある現代社会において、「出会い」はいかに体験されるのか、また、人間の生においてどのような意味をもつのか。本稿では、「出会い」の身体性の問題を軸として、現代社

会における「出会い」の今日的な意味を考察する。

第一章 「出会い」と現代社会

第一節 「出会い」をめぐる議論

「出会い」は人間の成長にとって重要な出来事として、哲学や人間学、教育学などで議論されてきた。「出会い」をめぐる議論は、人間の自己理解に対して、次のような問いを投げかける。人間は他者や世界とのどのようなかわりに生きているのか。また、そのかわりは人間に何をもたらすのか。

「出会い」の概念の出現は、M・ブーバーによるところが大きい。ブーバー(1923)は著書『我』と『汝』^⑥の中でこの概念を表した。かれは「出会い」の概念を通して、人間の生における実存的な他者性を見出す。ブーバーは、世界に向かう人間の態度を次の二つとする。一つは「我」と「汝」^⑦、もう一つは「我」と「それ」である。「我」と「汝」において、「我」と「汝」とは実存をもつて向かい合っている。一方で「我」と「それ」においては、相手を対象化しているという。かれによると、「我」と「汝」の関係のなかで「我」が「汝」と出会うといい、そうした「出会い」^⑦が生に欠かせないものであるとする。

このようにブーバーは、他者や世界とのかかわり方には、相手を対象化するような仕方と、お互いの実存をもって出会う仕方があることを示した。「出合い」は「我」と「汝」のような実存同士の関係のなかに起きるものといえる。

O・F・ボルノーは「出合い」の概念を教育の相のもとで問い直す。これは教育における従来の人間観が、発達の形式としての連続性を前提としていることを指摘する。そうではなく、それぞれの人間に起きる個々の事象を、その人間の生において意味をもつものとして見出す。そこには、予期することのできない、しかしそれまでの生き方が変わるような事象がある。「出合い」はそうした事象として、その人間の自己形成としての意味をもつという^⑧。かれは「出合い」を次のように定義する。

出合いは、強力な形でそれまでの生活の連続の経過をとつぜん（マ）に中断し、生活に新しい方向を与えるような、「非連続な形」の一つである。^⑨

「出合い」は予期せず訪れ、その人間の生き方を突然変えるような出来事であるといえる。かれは「出合い」の概念を通して、人間の成長には、他者とのかかわりによる予期せぬ偶然的な要素があることを示したといえる。

「出合い」の概念は次のようにまとめることができる。

- 1 「出合い」は「我」と「汝」のような実存同士の関係に起きる。
- 2 そうした「出合い」は予期しないものである。
- 3 「出合い」を通して人生が根本から変わることがある。

以下、「出合い」における「汝」にあたるものを「あなた」と表記する。その対になる「我」を「わたし」と表記する。本稿では、「出合い」

における「あなた」は人間に限らないものとして捉える。

第二節 現代社会におけるかかわりの状況

近年、ICTに代表されるテクノロジーの進展などにより、人間と人間、事物、出来事などのかかわり方が複雑になりつつある。例えば日本で二〇〇七年頃からスマートフォンが普及しはじめ、日本の世帯保有率は二〇一三年に五〇パーセントを超え、個人保有率は二〇一五年に五〇パーセントを超えている^⑩。こうしたデジタル端末の個人への普及は、ビデオ通話やメール、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス^⑪）などを用いたコミュニケーションを日常の生活に身近なものとしている。ICTに必要な環境の整備も進み、「テレワーク」や「オンライン授業」など社会生活におけるICT活用も広まっている。

こうした状況は、人間のかかわり方において何を表すのか。新型コロナウイルス感染拡大の混乱によるICT活用の加速は、この問いに対するひとつの見方を示している。

新型コロナウイルスの特徴のひとつに、感染していても無症状の場合があり、気づかないうちに他人に感染させる可能性があることが挙げられる。そのため感染拡大防止の観点として、「人と人との距離」を保つことが掲げられた。ここでいう「人と人との距離」とは、「身体と身体との距離」に他ならない。人間は身体と身体との距離を取りながら、かかわりを維持しようとしているのである。

この見方においては、「社会的距離」を取ることや「密集、密接、密閉」を避けることは、身体と身体との間に一定の距離を保つ試みといえる。一方で「テレワーク」や「オンライン授業」などのICTの活用は、身体と身体を隔絶する試みといえよう。つまり、ICTなどのテクノロジーが普及した現代社会を前提として、人間と人間、事物、出来事などとの

かわりについて考えようとする時、〈身体性〉がその議論を拓く鍵となると考えるのである。パソコン、タブレット端末、スマートフォンなどのICT関連機器を媒体とし、インターネットや回線を介して行うかわり方は、対面や直接的なかわり方で前提としていた時間的、空間的、身体的条件を越えた形態なのである。

第三節 なぜ「出会い」の身体性が問われるのか

人間や事物、出来事などのかかわり方の変化に伴って、身体を通して日常の経験が変わりつつあると考えられる。それは、人間と人間や事物、出来事などとのコミュニケーションの形態の変化のみを指すのではない。

たとえば、ICTの一切ない時代社会に生まれ、生きる人間と、生まれた時からICTがその生活に身近な時代社会に生まれ、生きる人間とでは人間の成長のしかたを同じように考えてよいであろうか。

片山洋之介は、身体について考えることの意味を次のように述べる。

人間は内なる人間性によって規定されるのではなく、外的な世界——他者とともにある共同世界に支えられ、これにはたらきかけることによって生きている。身体的主体は、独自の意味の統一体でありつつ、その意味を外界へ投げかける行動の中で逆に意味づけられ、この交流の中で他者と共有する意味の場を作り上げていく。¹²⁾

片山によると、人間は他者や世界とのかかわりに生き、そうしたかわりはまた人間を規定するという。身体は日常の経験の主体として捉えられる。

現代社会において、ICTが個人の生活や社会生活に身近なものとなっ

ている状況は、日常の身体の経験が変わりつつあることを示唆する。現代社会の状況は、すでにこれまでの人間の自己理解の枠を越えた状況にあるといえるのではないか。ICTのようなテクノロジーが日常の経験に進出すればするほど、こうしたテクノロジーがなければ成立しない社会や人間になっていくと考えられる。つまり、身体を通して日常の経験の変容は、人間のあり方そのものにも変容をもたらすであろう。

では、「人間は他者や世界とのどのようなかわりに生きているのか。また、そのかわりは人間に何をもたらすのか」について、再び問わねばならないであろうし、そうした問いなしには、現代やこれからの時代の教育に必要な人間観を提出することもできないであろう。この議論を拓くために、現代社会における「出会い」の身体性とはどのようなものであるかを考察したいのである。

第四節 教育人間学的方法

これまで述べたように、本稿では現代社会における「出会い」について、身体性を軸に考察する。この問題の提起から考察まで、教育人間学の方法をとる。

今日に至るまで、教育人間学には様々な構想があるが、いっくでは1970年代までの教育人間学をゲルナー(1974)にならい二つに分類し、近年の代表的な構想と合わせて三つに大別する。一つ目は、世界と対応する人間という、全体としての人間の本質を哲学的に洞察し、個々の教育現象を理解しようとするものである。¹³⁾ 先に例を挙げたボルノはここに位置づけられる。二つ目は、教育に関係のある個別諸科学の成果を教育科学的な問題として統合しようとするものである。¹⁴⁾ 三つ目は、従来の教育人間学の批判的考察から生まれた「歴史的教育人間学」¹⁵⁾である。これは斎野(2016)によると、「教育に関する人間学的言説を、特定の時代や文化

的背景をもつものとして歴史的観点からとらえなおす」立場とされる。¹⁶

これらの構想から教育人間学の性格を見出し、本稿では次の三つを教育人間学的方法として捉える。

- 1 人間を、すでに多様な経験をしつつ、他者や世界とのかわりから自らを形成する、歴史的で主体的な人間として捉える。
- 2 人間に関するあらゆる知見を教育のもとに取り入れて考察する。
- 3 現代やこれからの時代の社会を見据えた人間の自己理解を問う。

第二章 「出会い」の身体性

第一節 「出会い」の驚き

「出会い」にはどのような感情が伴うであろうか。様々な教師の「出会い」の実体験を記録した一冊の本の中で、中村誠延（2002）は自身の体験を次のように記している。

私はそこで一人の老先生に会った。（中略）以来ずっと私の心の片隅に、あの老先生は一体誰なのだろうかという思いが、残り続いていた。それから四十年近くの後の或る日、その老先生が、芦田恵之助先生（ママ）であつたと知った時、私は驚きと興奮で身体が震えるのを覚えた。¹⁷

「出会い」の瞬間、身体が震えたり、鳥肌が立ったり、息を呑んだりすることがある。かれは「驚きと興奮」を味わったという。「出会い」の衝撃を身体全体で感じ、またその衝撃が身体に表れているようである。

この驚きと興奮はどこからくるのか。九鬼周造（1935）は、偶然性に当

四

たる感情が驚異の情緒であるとする。偶然性をもってひとつの現実が現れたとき、それまで広がっていたあらゆる可能性は可能性ではなくなる。同時に、その現実が予期することができないものである。先に挙げた例でいえば、「出会い」が訪れた瞬間、「誰かわからない老先生」を「誰かわからない老先生」と思い続ける可能性はなくなった。また、四十年後に「芦田恵之介先生」として出会うことも、そもそも「老先生」に出会うことも、予定や計画のできるものではなかった。「出会い」が起きる瞬間、その現実が偶然性をもって訪れるといえる。

九鬼はまた、偶然性が驚異をもたらすことの理由を次のように述べる。

偶然性が驚異といふ興奮的感情をそそるのは問題が未解決のままに「眼前に」投出されるからである。¹⁸

「出会い」の瞬間においては、これまで「〈我〉と〈それ〉」であった諸々の関係が突然、ひとつの「〈我〉と〈汝〉」の関係となる。「あの老先生」はたちまち、「芦田恵之介先生」という一人の人間の実存として、「あなた」としてかれの前に現れたのである。「あなた」に向き合っている「わたし」は、「あの老先生は一体誰なのだろうか」と思っていた私ではない。ボルノーのいうように、「強力な形でそれまでの生活の連続の経過をとつぜん中断」²⁰されたのである。

演出家の竹内敏晴（2009）は「出会い」の考察のなかで次のように述べる。

人が今までの自分の枠から外へ踏み出す。そのとき裸である。このとき自我は、プラスでもないしマイナスでもない。ゼロ地点に立っている。²¹

九鬼が「問題が未解決のままに『眼前に』投出される」というのは、「出会い」においては、まず、その「出会い」の現実、「あなたとわたし」の関係に突然放り込まれるということがいえる。そこでは、これまでの生は通用しない。竹内のいうようにまさに「裸」であり、どこに踏み出すのか、どのように踏み出すのか、つまり「これからどのように生きるか」ということが問題となる。「出会い」の瞬間は、偶然性のきびしさをもって驚きという感情をもたらすのである。

第二節 「出会い」を味わう

「出会い」の瞬間は驚きの感情を伴うことがわかった。ではその時、実存としての「わたし」と「あなた」はどのように感じられるのであろうか。

重松鷹泰(1988)は、広い意味での「味」を次のように定義する。

それは、「ものごと」の本来的な、すなわち個性的な「呼びかけ」であり、その「呼びかけ」に対する、わたし自身自身の「対応」なのである。²²⁾

これは、「出会い」における「あなた」と「わたし」の関係をよく表す文章ではないかと感じる。

「出会い」の瞬間、「あなた」が現れ、「わたし」が向かい合う。このとき「出会い」の偶然性が驚きの感情をもたらすのであるが、その興奮のなかで、「この出会い」として味²³⁾わっているものは、「あなた」の味であり「わたし」の味であるのではないか、と考えてみる。

「その出会い」はひとつの現実である。出会われる「あなた」は、他の乙や丙でもないものではないという意味で、唯一無二の存在である。重

松が「個性的な『呼びかけ』」というように、「あなた」という実存としての味をもっている。一方で「わたし」は、「あなた」に向かい合う実存としての「わたし」である。相手を対象化して見ているときや、他の「出会い」のときとは異なる、その「あなた」に対する「わたし」としてある。「出会い」とは「あなた」という味を「わたし」によって味わうようなことであり、「出会い」における「あなた」と「わたし」は、重松が示した「味」の概念のように、直接的で相互的な関係にあると考えられる。「あの『出会い』が人生を変えた」というき、その「出会い」が人生にとってもつ意味を実感していることが表れている。それは「出会い」に解釈を与えているというより、意味をもった体験として経験していると考えるのである。

詩人の相田みつをは二人の「出会い」について次のように述べる。

「あの時、あの場所で、あなたに出逢っていなかったならば、私達二人の、いまの生活はなかったのだなあ……」

と、出逢いの尊さ、重大さ、そして、不思議さ、というものを二人で静かに、しかも感動深くかみしめてもらいたいと思います。²⁴⁾

「出会い」は、わたし一人によって起きるものではない。なぜなら、「その出会い」にはつねに、「他にもないあなた」の存在があるからである。「この時、この場所で、この人に出会い、このような人生になるのだ」という計画は成立しない。にもかかわらず、「その出会い」が現れたら「あの時、あの場所で、あなた」以外にはありえなかった。「その出会い」における「あなた」と「わたし」の味わいによって、生活は形作られていく。相田のいう「出会い」の「尊さ、重大さ、そして、不思議さ」は、このようなことを表していると考えられる。

「あなたとわたし」の予期しない「出会い」によって、自分でも思いがけなかった、しかし自分でしかありえない自分に成っていく。「あの出会いがあつてよかった」と思うこともあれば、「あの出会いさえなければ、こんなことにはならなかったのに」と思うこともある。しかし、「出会い」そのものに味の良し悪しがくっついてくるのではない。わたしがその「出会い」をどのように体験し、どのような自分に成っていくかが問題なのである。

第三節 「出会い」に拓かれる

こうした「出会い」はいかにして拓かれるのか。相田が「出会い」について表した次の詩からは、「出会い」が成立する要素が読み取れる。

いつ／どこで／だれとだれが／どんな出逢いをするか
 どんなめぐり逢いをするか／それが大事なんだよなあ²⁴

この詩から、ある「出会い」が成立する要素として、「その時」、「その場所」、「あなたとわたし」があることがわかる。

絵本作家の安野光雅（2018）は、旅の途中にあったある風景にまつわるエピソードを記している。ここで絵を描こう、と思う場所を見つけたが、よりふさわしい場所を求めて先へ進む。しかし、やはり最初の場所がいちと思ひ戻ってみると、風景が変わっていたのだという。

風景だからいつも同じものがそこにある、というほうが間違いないのだ。そもそも、太陽や雲の位置が違いますし、船も同じ位置にいるわけではありませんし、天候も変われば、何より自分の気持ちも変わるので、その場所に戻ってみても、最初に出会った景色では

なくなっているわけです。²⁵

六

「出会い」の概念から考えると、ある風景に出会いかけて通り過ぎてしまったエピソードとして捉えることができる。つまり、わたしが「その風景」を見るだけでは、「出会い」になるとは限らない。それは、その時も、その場所も、その風景も、それを見るわたしの気持ちも、その時のものだからである。

安野がその時の「自分の気持ち」も関係すると感じたように、「出会い」が生じるときは、わたしの側にも背景があるようである。たしかに、「何か」にふれても気に留めず通り過ぎたり、「何か」を理解することができなかったりしたら、真に出会うことはできないであろう。ボルノーは「出会い」が起きる条件について、次のように述べる。

この人が、これを受容するだけの能力をもっていることも、同時に必要なのである。たとえば、数多くの、人間をその奥底からゆりうごかす、緻密度のたかい芸術作品との出会いも、これに先行する基礎的な陶冶がなければ、決して初めから起こりうるものではなかったであろう。²⁶

ボルノーによると、この「芸術作品」を理解する「基礎的な陶冶」がなければ、その「芸術作品」が「あなた」として向き合われる可能性はなかったという。「先行する基礎的な陶冶」とは、その「芸術作品」をとらえる眼であると考ええる。その作品の作者や制作年を知っていた、というより、そうした情報も含めて、自分自身がその作品が語るものに耳を傾けられるだけの背景を持っていた、ということである。その背景は、本人のそれまでの様々な知識や経験を指すと考えられる。

「芸術作品」を理解できることによって「出会い」の可能性が生まれると考えられるが、「出会い」においてはもうひとつの背景があると考ええる。それは、その「芸術作品」が自分にとって他人事ではなくなるだけの、自分の生に対する構えである。

「出会い」においては、まず、「あなた」に気づくことによってそれまで続いていた生き方に疑いが生まれ、それまでの生き方の枠には収まらなくなる、ということがある。ボルノー (1973) が生の「中断」^⑧と述べ、竹内 (2009) が「ゼロ地点」^⑨と表現するようなことである。そこから、これまでとは異なる方向をもった見方や考え方が生まれ、世界が変わって見えるようになる。それは、「目から鱗が落ちる」という言葉に表されるようなことである。

「何か」を最初から対象化して「それ」として決めてかかるような態度でいることは、「出会い」から遠ざかるのではないか。鱗に固執していたり、鱗の影で安心していたりしたら、鱗が落ちることはないであろう。つまり、それまでの生き方に固執していたり、それまでの生き方の枠の範囲で物事を捉えたりしたら、世界がまったく違って見えることも少ないと考えるのである。他人事ではなくなるだけの自分の生に対する構えとは、自分とは異なる実存との交わりによって、自分の実存としての生が揺るがされたり、新たな方向が与えられたりすることそのものに開かれている、ということである。

この意味で、「出会い」においては、他者や世界に対する準備だけではなく、わたしという生に対する準備も必要であろう。それは、他者や世界とのかかわりを通してわたしの生き方が変化することを許している、ということである。それは、「わたしはどのように生きるか」という問いをつねに持っているということでもある。

「出会い」に拓かれるわたしの側の背景とは、「あなた」をとらえ、「あ

なた」によって自分自身への問いが成立するような、知識や経験、問題意識である。他者や世界に対する関心も、自分の生き方に対する関心も、同様に重要なのである。

第三章 現代社会における「出会い」の身体性

第一節 情報と「出会い」の背景

「出会い」が拓かれるとき、「あなた」によって自分自身への問いが成立するような知識や経験、問題意識が背景にあることを挙げた。一方で、「出会い」は予期せず、どのような知識や経験、問題意識が背景となるかはわからない。すると、本人に様々な知識や経験があることが、その人間を「出会い」へと拓くと考えられる。

現代社会においては、インターネットや回線の整備と、パソコン、タブレット端末、スマートフォンなどのIoT関連機器の普及によって、その環境があれば大量のあらゆる情報に瞬時にアクセスすることが可能である。これまで紙の本で探していたことをデジタル端末で検索したり、遠く離れた国の景色を、実際に見に行かなくても、地図や動画を端末上で見て確認したりできる。

では、現代社会においてはこれまでよりも様々な知識や経験が得られ、「出会い」により拓かれるかという点、そうではないように思われる。単に情報に接することと、「出会い」に拓かれる知識や経験が豊かになることは、別物ではないか。端末上で見れば知識や経験は身につかないという点ではなく、この身体性の違いが、「出会い」を喚起するような知識や経験にとって何を意味するのかを考えたのである。

M. ウルフ (2018) は著書『デジタルで読む脳×紙の本で読む脳』のな

かで、本を読むときの背景知識がいかに広がるかを述べている。彼女によると、まず、新たな情報を見るときは、媒体に関係なく自分自身の背景知識を用いて評価しているという。²⁹その上で、背景知識は、深く、幅広く読むことで豊かになる。豊かになった背景知識は、新たに深く読むことにつながり、そのことがまた、背景知識が豊かになることにつながる。³⁰「深く読む」とは、例えば「行間を読む」という言葉に表されるようなことである。それは、見える情報から見えないところに想像を膨らませること、そこで自分自身にある知識や経験を用いて自分で考えることといえる。反対に、情報を単に見るのみで、自身の知識や経験から考えることをやめれば、知識や経験が育つことから遠ざかるであろう。やみくもに情報に接するのみでは、背景知識は広がりにくいと考えられる。

ウルフは、大量の情報が溢れる現代社会の状況において人間がどのように情報と接するかを示している。彼女によると、様々な機器からくる大量の情報に接するとき、過剰な認知の負担を軽減するために情報を簡略化し、短い時間で処理し、「知る必要性」と「時間の節約の必要性」を量っているのだという。³¹では、そのように情報に接する場合、背景知識は豊かになるであろうか。「出会い」においては、どのような知識や経験が組み合わさって背景となるかはわからないのであるが、何かを「知ること」と「時間の節約」を量りにかけることができるであろうか。

M.エンデ作の小説『モモ』のなかに、次の一節がある。

時間をケケケチすることで、ほんとうはぜんぜんべつのなにかをケケケチしているということには、だれひとり気がついていないようでした。³²

時間を節約することで本当は何を「ケケケチ」しているのかというと、

続きにはこうある。

時間とはすなわち生活なのです。そして生活とは、人間の心のなかにあるものののです。³³

日常の生活のなかに、あらゆる人間や事物、出来事とのかかわりがある。その人間や事物などのひとつひとつを感じながら、見えないものや聞こえないものを、これまでの知識や経験を役に立てて想像する。そうして考えたことを心に秘めながら、また新しいものにふれていく。背景知識は本やデジタル端末などの外部にあるのではなく、自分自身にある。「出会い」に拓かれるような様々な知識や経験は、身体の実感として積み重なるもの、身につくものなのである。重松（2013）は論考「身体と教育」のなかで、「身体は、わたくしたちの追求の主体であるとともに、追及の手段でもある。」と述べる。「出会い」の背景が豊かになるには、日常の生活のなかで、身体で探索し、身体で感じ、身体で考える体験が重要であろう。

第二節 現在をいかに生きるか

「出会い」に拓かれるには身体による体験が重要であると考えられるのであるが、現代社会においては何が問題となるのか。

九鬼（1935）によると、驚異の感情は偶然性の現在性に基づいているという。³⁵他方で可能性は未来に対する希望や心配を、必然性は過去に対する満足や憂鬱をもたらすという。³⁶「出会い」の瞬間の偶然性は、「あなた」と「わたし」が出会うまさにその瞬間の現在性を表すと考えられる。

ふり返ってみれば、日々は大なり小なり偶然性による驚きの連続であるともいえる。「天気予報で晴れと聞いていたけれど雨が降って驚く」と

いうこともあれば、「感染症の影響で明日から学校に行けなくなるとは思ってもみなかった」ということもある。物事は予定や計画のとおりに進むとは限らない。たとえ「予定通り」であっても、予定や計画したことを行っているその時は、まぎれもなく現在を生きているのである。

新型コロナウイルス感染拡大の混乱のなかで、あらゆる予定や計画が難しくなっている。卒業式の中止やオリンピックの延期など、すでにあった予定や計画が延ばされたりなくなったりした。また、これからの予定や計画を立てることもこれまでのようにはいかない。感染症に関するあらゆる状況がどのようなになるか、予想は可能性にすぎず、その時何が現実となるかはわからないからである。もちろんこの予想も、そのために過去から学ぶことも重要なことであるが、前例の少なさと影響の広さが、この問題をますます難しくしているように思われる。

第一章第三節で述べたように、人間は日常のかかわりに生き、かかわりそのものが人間を規定すると考えられる。この時間性を考えると、人間は常に「現在」の状況に対応しながら、その対応がまた人間を形成するといえる。つまり、「今、どのように生きるか」によって、人間の生は形作られていくのである。すると、「今、どのように生きるか」ということが、ますます重要であると感じられるのである。

新型コロナウイルス感染拡大の混乱のなかでは、「テレワーク」や「オンライン授業」などICTの活用が活発になっており、そのためのインターネットや回線、ICT関連機器などの環境を整備することも広がっている。

では、人間はICT活用によって今をどのように生きているのか。ICT活用によって「何を」しているのか。例えば「オンライン授業」は、対面による授業を「代替する」ものとして捉えられるか。

対面による授業を成立させるものは何か。児童や生徒など（以下、「子

ども」と表記する）の存在、教師の存在、そして子どもと教師がともにある空間と時間である。その場所で、見えるもの、聞こえるもの、触れるものなどの全てを身体で感じながら、「こうするにはどうしたらいいだろう」、「どうしてこの登場人物はこのようなことをしてしまったのか」、「これはこの前見た光景と似ているようだ」などとあれこれ考える。考えながら、実際に試したり、書いてみたり、口にしてみたりする。そうして考えたことや試したことは、同じ時間と空間のなかに現われる。その場に今現れたことを通して、思いがけず新たな考えに気づいたり、自分の考えと比較したり、また、教師によってこれまでの意見が整理されたり、新たな問いかけがなされたりと、そこにいる人の間にあらゆるかかわりが生まれる。授業の計画があっても、そこで現れるものも、そこから生まれるかかわりも、「出会い」のように、その時、その場で、「あなた」と「わたし」のものなのである。対面による授業は「先生の話」や「板書」を単に見たり聞いたりすることによって成立しているのではない。

ICT関連機器を用いて誰かと話すとき、次のようなことが起きる。映されたものは見えるが、映らないものは見えない。また、みなが一斉に話したら誰が何を言っているのかわからなくなるので、ひとりずつしか話せない。対面による授業であれば、沈黙による間によって考えを膨らませたり、はっとしたりするような経験があるが、ICTを用いるときは、沈黙があると通信の不具合を疑ったり、何か言わなければという焦りさえ感じたりする。わたしと身体的に直接的な関係にあるのは目の前にある機器であり、そこから見えるものと聞こえるものは、対面による授業で見たり聞いたり触れたりしていたものと比べて、どれほど限られたものであるうか。

「オンライン授業」では、それがライブ配信であっても、対面による授業のように同じ空間や時間をともにしているとはいえない。つまり、対

面による授業においてその場に起きる多様なかわりが、同じように現われるとは考えにくい。対面による授業と「オンライン授業」とでは、「同じ」ものを「同じように」見たり聞いたり、感じたりしているわけではなく、身体的条件の異なる体験なのである。すると、「オンライン授業」が対面による授業をそのまま「代替する」とはいえない。

新型コロナウイルス感染拡大の状況のなかにある今も、一定の収束が訪れた後でも、「出会い」の身体性が示すように、「その時」、「その場所」で、「あなた」と「わたし」との間に生まれるかわりが、人生にとって意味あるものとなる。「今、どのように生きるか」ということは、「今、わたしと他者や世界とがどのようにかわって生きるか」ということである。眼前にある他者や世界とともにある時間を味わうことが重要であろう。それは、他者や世界を味わうことでもあり、それに向かうわたしを味わうことでもあるのである。

第三節 かけがえのなさ

ICT関連機器を媒体として、インターネットを介して相手とメッセージの交換ができる機能がある。スマートフォン上でその機能を用いて知人と文章の交換をしていたときのことである。ふと、「もし相手からの返信が途中から人工知能によって作成された文章になっていたらとしても、気づかないかもしれない」と感じたのである。同様に、わたしからの返信が人工知能によるものにすり替わっても、相手が気づかないようなことも起こりうるのではないかと考える。

なぜそのようなことを考えたのかというと、実際に生身の人間が打った文章であれ、人工知能が作成した文章であれ、スマートフォンの画面上では同じように現われるからである。新井紀子(2018)によると、「AIには、意味を理解できる仕組みが入っているわけではなくて、あくまで

も、『あたかも意味を理解しているようなふり』をしているのです³⁷⁾という。人工知能に限らず、デジタル端末等を用いて人間が他の人間になりすますこともある。問題は、端末を用いたやり取りでは、相手を確かに感じることに一定の限りがあるように思われることである。それは、本章第二節で述べたような身体性が関係するであろう。

二〇二〇年五月二十七日付の中国新聞朝刊に、テレワークによる働き方について取り上げた記事がある。そこでは、新型コロナウイルス感染拡大のなかでテレワークをする会社員の率直な気持ちが掲載されている。

メールでもやきもきます。返信が遅いと「気分を損ねる表現があったかな」と余計なことを考えてしまつて。(中略)密な連絡が取れないと、仕事上の方針の違いや誤解が生じそうで不安です。相手の表情が見えないのがこんなに不便とは思わなかった。³⁸⁾

このエピソードからは、この会社員がそれまでは表情を見たり、実際に話したりするなど人間との直接的、対面的なかわりのなかで電子メールを活用してきたことがうかがえる。新型コロナウイルス感染拡大のなかで感じたことは、それまでの日常が、どれほど他者や世界との直接的で相互的なかわりのなかにあつたか、ということである。

たとえば「オンデマンド型授業」は、回線と機器などの諸々の環境を用意すれば、いつでも、どこでも、「密」にならなくてもすることができるのであるが、いつでも、どこでも、「密」にならなくてもできる、ということは、「今」である意味も、「ここ」である意味も、「ともにする」ことの意味からも、遠ざかることができるのである。そして、「ともにする」「この意味から遠ざかることは、あなたであることや、わたしであ

ることの意味からも、遠ざかることができるのではないか。

もちろん、感染拡大防止の観点から、つまり人間の健康や安全のために、身体と身体との距離を取ることは必要なことであり、そのために ICT が一定の可能性を発揮した面もある。一方で「出合い」の概念に表されるように、人間は他者や世界とのかかわりながら生き、そのかかわりのなかでまた「わたしはどのように生きるか」と考えていく。相手にとってわたしでない誰かでもありえるような、わたしにとって相手ではない誰かでもありえるような関係ではなく、「出合い」のような人間と人間とのじかのかかわりにこそ、「あなた」のかけがえのなさも、「わたし」のかけがえのなさも、あると思うのである。

終章

「出合い」は人間の成長にとって重要な出来事として、人間学や教育学で議論されてきた。ここでは、実存同士の予期せぬ「出合い」がその人間の人生を変え、形作っていくことが示されてきた。一方で現代社会においては、人間と人間、事物、出来事などの身体的なかかわり方が変わりつつある。こうしたかかわり方の変容が人間の「出合い」に何をもたらすのかを考察してきた。

「出合い」の身体性として、驚きの感情を伴うこと、「あなたとわたし」という実存を味わうこと、様々な知識や経験によって「出合い」に拓かれることが示された。現代社会においては大量で多様な形式の情報が存在するが、「出合い」に拓かれる知識や経験は、身体的な体験によって身につくと考えられる。また、予期せぬ「出合い」が人生を変えるように、「現在」をいかに生きるか、とくに他者や世界とどのようにかかわって生きるかが重要である。そして、「出合い」のようなじかのかかわりにこ

そ、「あなたとわたし」のかけがえのなさを実感できると考えられる。

さらなる課題は、まず、「ことば」の問題である。文字や言葉は時間、空間、身体を越えて「出合い」をもたらすことがある。本稿ではそのことについて触れることができなかった。またそれに関連して、「物語」の問題もある。例えば映画やアニメーションをデジタル端末で見ることもあり、それを見ながら創造を膨らませることもある。内容と媒体の関連を含め、「物語」が現代社会における「出合い」にとってもつ意味を考える必要がある。そして、人間の発達の段階に関する考慮がなされていないことである。たとえば乳幼児期における「出合い」と思春期における「出合い」は、異なる意味や性格をもつものになるであろう。そうした意味で、教育における必要なかかわり方も変わってくると考えられる。これらのことは今後の課題として進めていきたい。

注

- ① 日本では情報処理や通信に関する技術の総称として「IT (Information Technology)」が用いられてきたが、ネットワークを利用したコミュニケーションの重要性が増大したことや、国際的に ICT が一般的であることなどから、近年では ICT が用いられる傾向にある。
- ② たとえば、『現代カタカナ語辞典』旺文社 2013 年 (電子辞書版)
- ③ NIID 国立感染症研究所ホームページ 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 関連情報ページ <https://www.niid.go.jp/niid/ja/diseases/ka/corona-virus/2019-ncov.html> (最終閲覧日 2020 年 9 月 21 日)
- ④ 感染防止対策のために、人との距離を 2 メートル、最低 1 メートルとすることが推奨されている。厚生労働省ホームページ Q&A、自治体・医療機関・福祉施設向け情報 <https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/ga-jichitai-iryokukan-fukushishisetsu.html> (最終閲覧日 2020 年 9 月 21 日)
- ⑤ 感染防止対策のために、人と密閉の空間にいること、人と密接すること、人と密接することを避けることが推奨されている。厚生労働省ホーム

- ページ Q&A' 自治体・医療機関・福祉施設向け情報 <https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/qa-jichitai-iryokukan-fukushishitsesu.html> (最終閲覧日 2020 年 9 月 21 日)
- ⑥ Buber, M. (1923), *Ich und Du*, Im Insel-Verlag zu Leipzig. (M・ブーバー 植田重雄訳『我と汝・対話』岩波書店 1979 年)
- ⑦ 厳密には、「〈我〉と〈汝〉」の関係の中で「永遠の汝」としての「神」にふれ、「我」と「汝」が出会うところ。
- ⑧ Bollnow, O.F. (1973), *Anthropologische Pädagogik*, Tokyo: Tamagawa University Press (O・F・ボルノー 浜田正秀訳『人間学的に見た教育学改訂第二版』玉川大学出版部 1981 年 p.77)
- ⑨ Bollnow, O.F. (1973) (O・F・ボルノー 浜田正秀訳 (1981) 前掲書 pp.76-77)
- ⑩ 総務省「平成 29 年版情報通信白書 (PDF 版)」p.3 総務省ホームページ <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h29/pdf/29honpen.pdf> (最終閲覧日 2020 年 3 月 31 日)
- ⑪ デジタル大辞泉による「《social networking service》個人のコミュニケーションを促進し、社会的なネットワークの構築を支援する、インターネットを利用したサービスのこと。趣味、職業、居住地域などを同じくする個人同士のコミュニティーを容易に構築できる場を提供している。」と定義されている。朝日新聞社「コトバンク」ホームページ <https://kotobank.jp/word/SNS-1442> (最終閲覧日 2020 年 9 月 16 日)
- ⑫ 片山洋之介『日常と偶然』理想社 2016 年 p.67
- ⑬ Gerner, B. (1974) *Einführung in die pädagogische Anthropologie*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft (B・ゲルナー 岡本英明訳『教育人間学入門』理想社 1975 年)
- ⑭ Gerner, B. (1974) (B・ゲルナー 岡本英明訳 (1975) 前掲書)
- ⑮ Wulf, C. (1994). *Einführung in die pädagogische Anthropologie*, Deutsch: Bertz Verlag. (C・ウルフ編著『教育人間学入門』玉川大学出版部 2001 年)・櫻井佳樹「教育人間学」教育思想史学会編『教育思想事典〔増補改訂版〕』勁草書房 2000 年 第 1 版 2017 年増補改訂版 pp.173-176 など
- ⑯ 鳶野克己「序論 体験をめぐる教育人間学の試み」鳶野克己編『人間を生きるということ』「体験」の教育人間学に向けて』文理閣 2016 年 p.2
- ⑰ 中村誠延「三、出会いの不思議」ひろしま国語教育大河の会編『人、この素晴らしき出会い―国語教師として生きて来よう』pp.118-123 溪水社 2002 年 p.118
- ⑱ 九鬼周造『偶然性の問題』岩波書店 1935 年 p.272
- ⑲ 九鬼周造 (1935) 前掲書 ただし、筆者によって旧字体を新字体に変えている。
- ⑳ Bollnow, O.F. (1973) 前掲書 (O・F・ボルノー 浜田正秀訳 (1981) 前掲書 p.76)
- ㉑ 竹内敏晴『「出会い」ということ』藤原書店 2009 年 p.215
- ㉒ 重松鷹泰「味を味わう」奈良女子大学附属小学校学習研究会『学習研究』1988 年 6 月 第 313 号 奈良女子大学附属小学校学習研究会『学習研究』誌第 96 号より 第 355 号 重松鷹泰先生 特別寄稿 論文の全い』p.154
- ㉓ 相田みつを『一生感動 一生青春』学校法人文化学園文化出版局 1990 年 p.13
- ㉔ 相田みつを (1990) 前掲書 p.20 ただし「」は改行を示す。
- ㉕ 安野光雅『かんがえる子ども』福音館書店 2018 年 p.92
- ㉖ Bollnow, O.F. (1959), *Existenzphilosophie und Pädagogik*, Stuttgart: Kohlhammer (O・F・ボルノー 峰島旭雄訳『実存哲学と教育学』理想社 1966 年 p.202)
- ㉗ Bollnow, O.F. (1973) (O・F・ボルノー 浜田正秀訳 (1981) 前掲書 pp.76-77)
- ㉘ 竹内敏晴 (2009) 前掲書 p.215
- ㉙ Wolf, M. (2018), *Reader, Come Home: The Reading Brain in a Digital World*, HarperCollins (M・ウルフ 大田直子訳『デジタルで読む脳×紙の本で読む脳「深い読み」が広がるバイリテラシー脳を育む』インターシフト 2020 年 p.78)
- ㉚ Wolf, M. (2018) (M・ウルフ 大田直子訳 (2020) 前掲書 pp.78-79)
- ㉛ Wolf, M. (2018) (M・ウルフ 大田直子訳 (2020) 前掲書 p.105)
- ㉜ Ende, M. (1973), *MOMO*, Stuttgart: Thienemanns Verlag (M・エン

- デ 大島かおり訳『モモ』岩波書店 1976年 p.95)
- ③③ Ende, M. (1973) (M・エンデ 大島かおり訳 (1976) 前掲書 p.95)
- ③④ 重松鷹泰「身体と教育」奈良女子大学附属小学校学習研究会『学習研究』1973年12月第226号 1988年6月第313号 奈良女子大学附属小学校学習研究会『学習研究』誌第96号～第335号 重松鷹泰先生 特別寄稿 論文の全い』 p.83
- ③⑤ 九鬼周造 (1935) 前掲書 p.272
- ③⑥ 九鬼周造 (1935) 前掲書 p.271
- ③⑦ 新井紀子『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』東洋経済新報社 2018年 p.108
- ③⑧ 広島市の会社員男性 (26) 楽暁雨・林淳一郎「この働き方大丈夫? 第3部テレワークのうねり1」『中国新聞朝刊(紙面)』中国新聞社 2020年5月27日付
- (本学大学院博士前期課程)